

# 市場化と大学生協

全国生活協同組合連合会  
会長理事 庄司興吉

## 1 最近の情勢

### グローバル化の進展

前回の地域センター会長・事業連合理事長会議は、3月初めに松本でおこなわれました。その後いろいろなところで、挨拶や報告をさせていただく機会がありました。3月にはアメリカ大学店舗協会(NACS)の総会を視察し、6月にはベルリンでの学生支援国際会議で日本の大学生協のことを報告してきました。その前に、スペイン・バスク地方の協同組合の視察もおこなっています。協同組合方式で、いろいろな企業の経営や大学運営までしていました。

いろいろなことを感じましたが、全体としてグローバル化が急激に進んでいるという感じですが、その大きな現れの1つとして中国の問題があり、とくに食品と知的商品の分野に現れています。現代世界には、食・衣・住・性・動(移動)・信(コミュニケーション)をつうじて、われわれの身体を形成する特別な力が働いていて、それをつうじて帝国のような世界支配のシステムが働いている。中国は、このシステムの食にかかわる部分やコミュニケーションおよび知的財にかかわる部分を脅かしているのです。

注目していかなければならないと思います。インドも激しい勢いで追撃しておりますし、ロシアやブラジルも延びてきて、世界経済が大きく変わってきています。ブラジル、ロシア、インド、中国という人口大国が経済成長の軌道に乗ってきているという、いわゆるブリックス(BRICS)問題ですが、その影響をわれわれも受けざるえない状況になってきているのです。

### 法人化後の大学

その中で大学は、法人化して3~4年になります。法人化によって大学もグローバルな市場化に自らを開き、その波に飲み込まれながら生き残るために、経営中心にならざるをえない状況になっています。

学長選びのパターンの変化にもそれは現れています。選挙によって選ばれていたのが、かならずしも選挙の結果を尊重しなくてもよくなってきており、選挙の結果とは別に学長が選ばれるケースも増えてきています。新潟大学、東北大学でも総長が代わり、選挙の方式ではないやり方で選ばれました。また、山形大学でも、新聞報道等にもありましたが、選挙の結果一位ではない、文科官僚が学長に選出されるということがありました。大学の自治などとうにないのですが、そのことに構成員がどの程度気づいているか、まことに心もとない状況です。

### 大学生協の対応

このような中で、私がかかわったものの1つに京阪神教職員セミナーがありました。大学教育のカウンセリング化、食育の見直し、PC 総合サポートでのチームづくりの報告があり、「生協もけっこう頑張っているな」という内容でした。

その後、京滋・奈良理事長会議が行われ、京阪神セミナーを受けて話をさせていただきましたが、いくつかの議論がありました。現代の学生をどう見るかについて、私の「われわれの寿命が伸びてきているので、若者がゆっくりと成長するようになっているのではないか」という発言に、「それはどういう証拠に裏付けられているのか」という質問があったり、「食育は「美しい日本」を唱える政府も言っていることなのではないか?」という意見が出されたり、「PC サポートはわれわれのところでは大学の教育としてやっている」という報告をいただいたりしました。

その後、私の今いる、小さなカトリック系の大学、清泉女子大学で生協づくりの話が進んでいて、東京地域センターの担当者にきていただいたりしました。また、東大生協の顧問会議もあり、顧問や理事の先生方から難しい本の話が出されて、議論になったりしていました。東大では、中央食堂の老朽化が進んでおり、配管の不良からか壁からにおいがしている、しかし改修するとなると、休止期間も含めて大変なことになるのではなか、ということでした。

古い有力な生協では、そんな問題も起こっているようです。全国各地で、生協に対抗するように進出してきているコンビニも、いろいろ見せてもらってきました。それらのことをふまえて、今日は、市場化のことについて問題提起させていただこうと思います。

## 2 市場の浸透

### 市場での競争が原則

グローバル化は市場化である、電子情報市場化であるということを、くり返し言ってきました。その中で大学生協が生き残ろうとするのであれば、進出してくる企業と競争して負けないようなやり方を考えなければなりません。圧倒的に資本力のある企業がコンビニを出してきたり、文房具でも、それに特化した企業が入ってくると、生協は太刀打ちできないという意見などが、東大生協の顧問会議などで出されていきました。

市場の問題、市場概念について、考えなくてはなりません。かつては分かりきったことであるかのように扱われていたのですが、マルクス、エンゲルスの市場認識も、考え直してみると、決して十分ではなく、偏っていたのではないかという気がします。

### イギリス社会主義の経験

それを考えるためにあえて言うのですが、イギリスでは、社会主義の歴史の中でフェビアン協会が現れ、それが元になって今日のイギリス労働党が出てきました。この協会が出来る時、論争がおこなわれています。バーナード・ショーが、いち早くフランス語に訳されたマルクスの資本論を読んで、その価値論を基礎にした資本主義批判を協会に持ち込もうとしたのですが、近代経済学のフィリップ・ウィクステッドとのあいだで論争が起こり、ウィクステッドが勝利しました。

それでフェビアン協会は、資本主義の矛盾を説明するのに、リカードの地代論を使って

資本が大都市という地代の高いところで事業をして利益を上げているのだから、その分を税として徴収しろという議論に転換していきました。都市は、ガス・水道・電気といった社会的基盤、社会資本が充実していて、その恩恵をこうむって企業は儲けている。その分を企業の利益として税で徴収して改革をおこなえ、という理論です。

これは明らかに、リカードやマルクスの労働価値説・剰余価値論からは逸脱して、違う方向に向かう議論でした。しかしその代わりに彼らは、当時消費者が起こした新しい運動、消費者民主主義に注目し、消費生活協同組合の元になったような組織に注目して視野に取り込みました。また、フェイビアン・ソーシャリズムには、ケインズの理論、国民全体を視野に入れたマクロ経済学の理論につながる要素もあり、それとも結びついて発展しました。ケインズ経済学にも助けられて、イギリス労働党はこれまで何回も政権をとってきたのです。

### ソ連東欧崩壊後の市場主義

一方、1980年代の末に、マルクスの価値論を教条主義的に守ってきたソ連東欧が崩壊しました。その反動として、崩壊後は、ごりごりの市場主義者ともいべきハイエクやフリードマンが改めて取り上げられ、復活しました。

私はあまり好きではないのですが、彼らの言ったことをあえて評価するとすれば、ハイエクの、人間の知にはどうしても限界があり、市場は完全情報になることはないので、経済は市場の自然な動きに任せるのがよいのだという主張には、それなりの真理性があります。グローバル化とともに、市場のそういう面が強調されてきました。

また、フリードマンは、市場を貨幣の流通量の調整をつうじてコントロールするという方法を提起し、これは今日の多くの国々で取り入れられてきています。これは、強調しすぎると、かつての国家社会主義の対極ともいえる思い上がりになって、マネーのコントロールで何でも出来るということになりかねない欠点を持っています。

しかしいずれにしても、これらの思想の基底に共通してある市場についての見方は、たしかにわれわれに市場の見直しを迫るものです。

## 3 市場の見直し

### アダム・スミスからポランニーへ

そこで、見直しを私なりにしてみると、まずアダム・スミスまで戻る必要があるでしょう。ご存じのように、スミスは『諸国民の富』の中で、市場の力を強調するとともに、市場が見えざる手 *the invisible hand* でコントロールされている、という主張を展開しました。その主張の背後には、『道徳感情論』というもう 1 冊の本があって、人間には本能的に共感力 *sympathy* があり、人のことを思いやる性質があって、市場競争の場でも行き過ぎることはないのだ、と考えていたからだと言われています。

しかし実際には、アダム・スミスの楽観論は文字どおり木っ端微塵に吹っ飛びました。カール・ポランニーの大転換 *Great Transformation* が起こり、世界は一変したのです。ポランニーは、市場を含む経済は多くの文明において社会の中に埋め込まれており、自立して独自に歩き出すことはなかったのだが、近代資本主義とともにその壁を破り、自立し

て動き出して、それ自体の論理で地球全体に広まってしまったことを明らかにしました。

大転換はなぜ起こったのか。アダム・スミスとのつながりで考えてみると、彼が持っていた共感力への信頼は、いわゆるイギリス経験論の人間性 **human nature** 論をベースにしたものでした。これは近代西洋の人間主義 **humanism** からきた独善であり、それが普遍的だと思っていたものが、歴史的展開のなかで暴力に転化していったのです。それがスミスの時代には、よく見えていなかった。

### 征服略奪とオリエンタリズムの形成

独善の暴力への転化は、どのように起こったか。15世紀の終わりから16世紀にかけて、ヨーロッパがスペイン・ポルトガルを先頭に世界に乗り出していったとき、乗り出す以前はある種の異文化への畏敬がありました。しかし、実際にぶつかって見ると相手が予想以上に弱かったために、畏敬の念が蔑視・差別へと変わっていったのです。一例として、西川潤氏の『飢えの構造』はその過程を明らかにしています。

異民族観の転換の顕著な例は、スペインの神父ラス・カサスの『インディアスの破壊についての簡潔な報告』にも見られます。ラス・カサスは、アメリカ大陸の征服のあと数十年して実際に行ってみて、キリスト教徒たちがおこなっていた蛮行に驚き、スペイン国王に手紙を書いてなんとか止めさせようとした。しかし、征服と略奪は、こんな良心の声を無視して南北大陸全体に広がり、大転換の基礎をつくりだしていったのです。

ヨーロッパは、こんなふうにして、アジア・アフリカでも、力の差を確認するとともに横柄な態度に出、それぞれの歴史を持つ文明を破壊していきました。こうした経験が歴史的に蓄積されて、ヨーロッパに、オリエンタリズムという、非西洋世界を型にはめて蔑視し、差別する意識が知らず知らずのうちに広がり根付いていったのです。サイードが、『オリエンタリズム』という有名な本の中でその過程を書いています。

### 植民地主義批判からポストコロニアリズムへ

20世紀になると、しかし、大転換を基礎にして成り立った帝国主義世界体制への抵抗が相次ぎ、ほとんどの植民地が解放され独立するようになります。そして闘争は、解放と独立後になお残された意識・思想面での植民地主義や形を変えた新しい植民地主義の批判にまで及んでくる。オリエンタリズム批判の登場に加えて、中南米からは、内的植民地主義の批判も出てきます。これは、中南米の実情が、政治的独立後も、アメリカの庭の中で植民地化されているようなものだ、という認識です。

それが逆にアメリカにも影響して、アメリカの黒人問題や少数民族問題を内的植民地として扱う研究が出てきます。それに加えて、イギリスからカルチュラル・スタディーズというのも出てきます。これはサッチャーの時代に、イギリスの社会学者たちが、サッチャーと衝突して旧植民地に流され、イギリスで発達していた文化研究の伝統を植民地文化の研究と結びつけた結果出てきた、ヨーロッパ的な学問の枠を超えた新しいタイプの文化研究です。

それらをふまえて、20世紀末からはポストコロニアリズムが出てくる。ヨーロッパでデリダが、現代思想の基礎になっているギリシア的思惟の根底までさかのぼって、フーコー、ドゥルーズ、ガタリなど現代思想のチャンピオンと呼ばれる人までを批判する道を拓いた。

それを使って、インド出身のスピヴァクが、「サバルタンは語るができるか」という問いを提起し、ヨーロッパの現代思想はそれ自身を徹底的に相対化したように見えるけれども、なお相対化しきれていない。旧植民地世界には、まだまだ表に出されていない歴史の層があり、それらを暴きだして見せないかぎり、現代思想の自己相対化はまだまだ十分なものではないのだ、というのです。

ポストコロニアリズムのこの問題提起は、先進諸国にも広がり、目に見えない微細な差別や内的植民地を掘り起こす作業につながりました。そういう文脈で、現代の先進社会を見直す研究が広がってきています。それらはいわば、大転換が地球の表面全体にもたらした蛮行の総点検なのです。

#### 4 市場の社会文化化

##### 大転換の仕上げとしてのグローバル化

マルクーゼはかつて、『一次元的社会』という本のなかで、現代社会は、現代技術の合理性による一次元的な支配が貫徹するという意味での、一次元的社会になりつつあると言いました。それが今や市場化に乗って世界中に広まり、グローバルな規模で一次元的な社会が形成されてきています。

それは、端的に言うと、地球上どこへ行っても同じものを同じ価格で——これは実際にはウソですが——買うことのできる社会です。食といえば、コカコーラ、マクドナルド、ケンタッキーフライドチキン、衣といえば、Tシャツ、ジーンズ、レディーメイドスーツ、住といえば、世界中どこへ行っても同じサイズ・作りの部屋を売り物にしているホリデイインのような空間。この空間で今や性までも規格化されてきていて、ホテルのエロ映画のように、世界中どこへ行っても同じ内容のセックスがはやっている。

動というか移動の手段も、今やフライト・アンド・レンタルカーという形で世界的に規格化され、信すなわちコミュニケーションの手段も、今や世界中どこでも同じように使える、インターネットにつながったケータイやパソコンになっている。われわれは、食・衣・住・性・動・信をつうじて、われわれの身体を日々つくりなおされているのです。

これに対抗するためには、経済学だけでは駄目です。人間はホモ・エコノミクスではない。もっともっと多様性を強調する人間論を展開していかなければいけない。しかし、そうすることによって民族主義に巻き込まれるのは危ないので、同時に注意もしなければなりません。小さくまとまって排外主義に陥ったりしないように注意しながら、市場の社会化・文化化を考えていかななくてはなりません。

##### 人間的な市場を基礎に社会的経済へ

これもマルクスの甘かった点ではないかと思うのですが、市場はもともととも人間的なもので、人間の欲望が渦巻く場です。それを無造作に無くしてしまったことに、ソ連社会がどうにもならなくなった大きな原因もある。私は、交感 *inter-affection* つまり感情のやりとりから始まって、いろいろなものの交換にいたる諸行為が社会の基礎だと思っています。交感から交換にかぎりなく広がる人間的な場が市場で、だからこそ市場を含む経済はもともと深く社会に埋め込まれていたのだ、というポランニーの見方が非常に重要な

のです。

こういったことを背景に、前回、神野直彦さんの「ケインズ主義的な福祉国家からシュンペーター的ワークフェア地方政府へ」という話に言及させていただきました。第二次世界大戦後、先進資本主義諸国でできたケインズ主義的な福祉国家は持たなくなって、グローバル化に巻き込まれている。それへの対抗的な動きとして、ヨーロッパでは、シュンペーター的ワークフェア地方政府がつくられてきている。シュンペーター的とは、その地域独自の技術革新を基礎にして、という意味です。失業したり、障害をおったりして働けなくなった人びとを救済することを主目的とするウェルフェア国家ではなく、働けるのだけれども職がなくて困っている人たちが増えているので、その人たちに職を与え、生きる道を与えていくワークフェア地方政府への転換が進められている、ということです。

南ヨーロッパで展開している社会的経済も、同様のことをねらっているのではないかと思います。バスクの協同組合組織はいうまでもなく、イタリアなどで社会的経済が広がりつつあります。ラテンヨーロッパでは組合のことをサンディカといい、組合活動を重視するサンディカリズムの伝統がありますが、それとイギリス発の協同組合とが結びつき、企業経営としても協同組合方式をとる流れができてきているのです。

#### 大学生協も総合性・社会性・文化性を生かしていく

これらのことと戦後日本の大学生協の歴史をふまえて、これから市場化の浸透にどう対応していくかを、考えなくてはなりません。その点から最後に問題提起をさせていただくと、日本の大学生協は、メインの国立大学ではほぼ独占性を維持してきました。それを基礎に総合性を維持し、食堂、購買、旅行などいろいろなことに手を広げ、社会的な視野を持って環境や平和にも取り組んできた。ある時期には、これらのことが政治的なものと結びつき、政治運動として展開されたこともありました。

しかも重要なことに、これらに加えて日本の学生文化をも育んできた。それが、学生運動の衰退とともに政治性は弱くなり、最近の大学の変化によって独占性も少しずつ弱まってきました。そういうなかで、総合性、社会性、文化性を生かして、市場化に対抗する方法を考えていかなくてはならないのです。学生・院生・留学生の総合性・社会性・文化性を活かして市場化に対抗していく。そういうやり方の1つとして生協の白石さんが話題になり、われわれも、ビジョンとアクションプランで、コミュニケーションとしての生協の面を活かして、それを基礎に食、学、動(旅行)、および相互扶助を位置づけ直そうとしたのです。

市場化のなかで生き残っていくためにまず競争力を付けることが第一ですが、単なる競争だけでは勝てない面が出てくるので、大学生協が培ってきた総合性、社会性、文化性を活かして対抗していく。市場は単に経済的なものではないので、それに対抗する本当の意味で総合的な競争力を、大学生協の歴史をふまえて強化していく必要があるのです。そういう狙いで、このような問題提起をさせていただきました。

(070804, 地域センター会長・事業連合理事長会議、071129, 最終稿)